



# 教皇様の叢

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 © 1992 発行所 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

## マリア 神の愛の証人

1 「あなたにあいさつします、  
恩寵に満ちたお方。」(ルカ1・28)

天使は、ナザレトの処女に向かつて「恩寵に満ちた方」と呼びかけます。処女はマリア、天使はガブリエルです。この名には特別な意味があります。ガブリエルとは「神の強さ」という意味なのです。「強さ」とは「力」、すなわち神の力のことで、従ってガブリエルは神の御力の使いです。彼はマリアに向かって「聖霊があなたにくんだり、いと高きものの影があなたを覆うのです。ですから、生れる子は聖なるお方で、神の子と言われます」(1・35)と告げます。お告げを終るにあたって、天使はつけ加えます。「神にはできないことはありません。」(1・37) 事実、神の御子が人間に、そして処女の子になられたのは神

の力、正確には神の全能の力によるものでした。

2 しかし、天使の名となつて

いる「神の強さ」は「勇氣」すなわち神の「力量」をも意味します。この意味で、天使の名「ガブリエル」は、お告げの内容とつり合っています。ある意味でこの名は御父と同等であるお方、人となられた神の御子の英雄的な徳を表しているからです。人の子、人間となることによって、神はこの上ない英雄性に満ちた愛を示しておられます。(フィリッピ2・6(11参照)) この愛の「英雄性」は、キリストの十字架、超越の秘義で頂点に達します。「この世にいるご自分の人々を愛し、彼らに限りなく愛を示された。」(ヨハネ13・1)

3 多くの人にとって、創造のわざや摂理に見られる神の

全能の力を認めることは、難しくありません。難しいのは、ベトレムやゴルゴタの十字架に見られる英雄性、すなわち託身と贖いに表れる英雄性と結びついた愛を認めることなのです。

マリアは永遠の御子において啓示された言い尽せぬ神の秘義を最初に認めた方でした。その御子とはマリアの子でもあったのです。

天使はマリアを「恩寵に満ちた方」と呼びました。マリアは神の力、すなわち愛に向かつて完全に開かれており、透明そのもの、信仰の輝きを放っています。「信じながら、幸い」な方です。マリアには罪の影も、原罪の跡さえありません。御子の贖いの愛はマリアを包み、この世に宿された最初の瞬間からマリアを満たしてしました。

4 この点に関しては、ナザレトの処女は、罪を犯した後のアダムは園の木々の間に隠れよう

とします。「どこにいるのか」という神の御声を聞いたとき、「裸なので、こわくなって隠れました」

と答えます。(創世3・9-10) そのような恐れは、それまで感じたことがなかったのです。罪を犯すまでは、神を正面から眺め、子が父に対するような親密さを保っていました。

この最初の恐れ、それに続く逃亡は、人類の歴史を通して続いています。神を愛するか背を向けるか選択を迫られた時、人はしばしば後者を選ぶのです。こうして自らの存在の深みにおられる神から「隠れる」のみならず、自分と創造主との間に垣根を造るので、神のことがわからなくなってしまうのです。神はもはや知的な仮説以上のもものではありません。実際には

第一の現実そのものであるというのに。こうして人間は、特に現代まるで神がいまさぬかのように生きていく日々の行いを正当化しようとしています。

5 これら全てのことにもかかわらず、マリアはこの世における神の現存を証する特にくれた証人です。「主はあなたとともにおいでになります。」(ルカ1・28) マリアの澄みきつた人間性を通して、神は私たちのただ中においてになります。自らを啓示される完全無欠の真理、託身と啓示の真理、「終ることのない」英雄的な愛の真理のうちに。(九一・十二・八)

## 病院にて

### 託身は苦しむ人々に力を与える

● 病に伏しておられる兄弟姉妹の皆さん。(…)

近づきつつあるクリスマススの祝いを前に、こうして皆さんをお訪ねし、心から挨拶申し上げ、皆さんのために祈りするのは、私にとつて大きな喜びです。特に、イエズスのご降誕を記念する聖なる夜、皆さんのために祈りすることを約束します。皆さんがこの神聖な祭りを迎えるために、病院付き司祭の指導のもと、準備に励んでおられることを承知しており

ます。皆さんが黙想しておられるのは、クリスマススの神祕の中心とも言ふべき次の一節です。「神の御子イエズス・キリストは聖霊の力によって処女マリアから御体を受け、人となられた。主は来られ、主は来られる。隔ての壁を取り除き、互いに力を合わせることを、連帯することを教えるために。」これは、託身とクリスマススの秘義への信仰表明です。同時に、世に來られる神の、ある一面に注目しています。すなわち全人類を協

力と連帯のうちに一つにし、イエズス・キリストによって贖われた神の子としての、真の兄弟愛を築くこと。キリストの到来によって、神は近い方となられました。キリストはへりくだって人間の体を取り、私たちと同じ者となられ、同じ生活を送られました。事実、ペトレヘムの馬小屋で、生れたばかりの幼く弱い赤子となられ、私たちを「神の子」として「くださったのです。(ヨハネ1・12参照)

● 本日の福音朗読は、聖マリアが、みごもっていた親戚のエリザベトを助けるため、ユダの町へと出発する場面です。神の御母による、このような親切で思いやり溢れる助けを見ると、私たちも我が身を振り返り、病院や養護施設の役割について考えるのに役立ちます。

マリアとエリザベトのように、この病院でも、皆がまず念頭においているのは、病人は心のこもった専門的な治療を受けるのが当然であるということです。これは教会の説くところとも一致しているもので、嬉しく思います。実際、過去何世紀の間、教会は精神的・肉体的な苦しみに会う人々の「そばに」いたのです。二千年間の歴史を通して、多くの聖人たちは機会を逃さず、ありとあらゆる方法で病人や怪我人、とりわけ極貧者や寄る辺のない人々を助けてきました。それは時代が変り、公的機関が医療の分野に携わるようになって現在でも、世界の各地で続いています。

います。

私はこの病院が技術的にたいへん高度なレベルを保ち、全ての患者に対して的確な診断と治療を行っていることを承知しています。それに加えて皆さんは、真の奉仕の精神と惜しみなく仕える精神で病人の必要を満たすため、皆が協力するよう努めておられます。ご存じのように、こうした医療施設においては、ただ自分の専門職に有能であるというだけでなく、人間性や理解力、友情、愛情にも秀でた人々が必要不可欠です。そうしてはじめて、病人は精神的な支えを得ることができ、入院という人生の困難な時期に慰めを受けることができ、入院と現実と看護の双方に携わるスタッフをつねに養成する必要があります。そうすれば病院は、「仕えられるためではなく、仕えるために来た」(マルコ10・45参照) イエズスを模範として、福音の掲げる愛の助けという理想から生命を吹き込まれた、大きな家族に変わることでしょう。

一人ずつで働くのではなく、共に働くことが大切です。一致の精神をもって、さまざまな専門分野にも敬意を払いつつ、そこからできるかぎりの利益を引き出して、病める兄弟姉妹のために役立てるよう努めましょう。また、病人と共に不安と心労に耐えている家族の人々のためにも。

● こうした望みを胸に、この病院のスタッフの皆さんと入院患者の皆さんの上に、神のご保護を祈り求めたいと思います。

(...) 病に伏す皆さんに、心からのご挨拶を送ります。クリスマスを目前にしたこの時に私がこの病院を訪れたのは、皆さんにお会いするためでした。家に帰りたくても帰れず、病院のベッドに寝ていなければならぬ皆さんのために一日も早い全快を願いつつ、神なる贖い主、ペトレヘムの馬小屋の貧しさと謙遜のうちに世に來ら

れた御方に祈りを捧げます。すみやかに病を克服するための力と忍耐力が与えられますように。神の優しさと摂理を信頼してください。神は誰をもお見捨てにならないとありませぬから。

皆さんの病氣は、苦痛に満ちた不可解な試練です。けれども挫けないでください。ペトレヘムの飼葉桶の神秘、すなわち人となられた神の秘義を前にする時、皆さんは信仰によって勇気づけられるはずです。クリスマスは、私たちが不安という暗闇から救い出す神からの光について考え、全ての人々、とりわけ苦痛にさいなまれる人々への愛を目に見える形で表すことを望まれた、至高の善なる御方になりまします。こうして皆さんは、クリスマスを持つ贖いの意義を再発見されることでしょう。クリスマスは外的と言ふより内的な喜びの祭り、涙や苦しみの中にあっても溢れ出る喜びの祭です。その喜

びは、キリストが強め、もたらしてくださる恩寵と、神と親しくつき合う生活、そして神の摂理と限りない愛への信頼から生じるものです。

● 皆さんは外科手術の医療機器を教皇に託し、それを使いこなすための技術と共に、伝染病に脅かされる貧しい国の人々のため役立てるよう、望んでおられます。皆さんからの貴重な贈り物に対し、本当に感謝いたします。私はそれを最も必要とする地域に送り届けましょう。幼きイエズスと、病める兄弟姉妹たちへのプレゼントとしてすばらしい値打があります。教皇は皆さん一人ひとりのことを心にとめ、お祈り致します。どうぞよいクリスマスと希望に満ちた新年をお迎えください。皆さんと家族の方々、皆さんの愛する人々のために使徒的的祝福を送ります。

(九一・一一・一二、ローマの貧しい人々の病院を訪問されて)

# 贖いと人間

## 人間は贖いのわざにあずかる

1 「神の霊によって導かれて

それは、西側諸国の若者たちと東欧の若者たちが初めて出会った、特筆すべき集会でした。80以上の国々から、あらゆる大陸から若者たちがチェストコワに集まりました。聖パウロのローマ人への手

紙の一節は、変りつつある世界に生きる現代の若者たちの抱える問題に、特別なインパクトを与えました。

2 待降節中の典礼は、特別な仕方

# 説教・講話・書簡等の抄訳

※カテケージズ・シリーズ別売のお知らせ ※「教皇様の声」に掲載されたカテケージズのシリーズのコピー版を別売しております。  
 シリーズ(1)「創造」「信仰と神」「天使の創造」「神の摂理」：九二頁、一〇〇〇円 シリーズ(2)「イエズス・キリスト―真の人、真の神」：一〇八頁、一二〇〇円 シリーズ(3)「贖いと罪」「聖霊」：九七頁、一二〇〇円 ご希望の方は精道教育促進協会まで。

に示しています。

ルカはマリアへのお告げの場面を記していますが、本日の福音朗読のマテオも同じような話を伝えていますが、二人の福音記者は互いに補い合っているわけです。夢の中でヨセフに告げられたことは、許婚の処女マリアへの天使のお告げとは違います。ある意味で、二つのメッセージはお告げと神の子の託身の秘義の、論理的全体をなしています。

永遠の御父は、永遠の御子の処女の母が、地上での配偶者ヨセフの人間の助けを得られるようお定めになりました。こうして二人の愛は神愛の核心に引き入れられ、マリアとヨセフという二人の男女の全き献身と共に受け入れられました。彼らは二人とも、互いに自己を開いていたがゆえに、特に偉大であったと言えます。これこそ彼らの聖性の源です。実際、人間の聖性とは常に、聖霊の働きかけに心を開いた結果なのです。

**3** 待降節は、この神からの働きかけを待ち受け、心を開く時です。「神は御独り子を与えたいまうほどの世を愛された。」(ヨハネ3:16) この御独り子を通して、神は人間の歴史に入り、御旨に合わせて歴史を形作られます。神は人間を通して創造全体の人間的な局面に介入されます。人間において、人間を通して神はエノマヌエル「神はわれわれとともにまします」(マテオ1:23参照)となられたのです。神が来られた

のは、世を救うためです。神の介入は人間の歴史を救いの歴史に変えます。「神がみ子を世に送られたのは、世をさばくためではなく世を救うためである。」(ヨハネ3:17)

**4** 信者にとって、歴史を作るとは神の贖いのわざに加わり、色々な方法で仕えることを意味します。皆さんには、大学での勉学を通して奉仕する機会も多々あります。真の社会進歩の基礎となる精神的諸価値を目指した理論上・実践上の知識を得るために、寄与することができるとのこと。人間の努力は、神の愛と知恵の超自然的な力が内側に働かなければ、実を結びません。そのために責任感、万人に保証されるべき自由の尊重、そして超越性に心を開き、誠心誠意真理を擁護することが必要です。

自由と真理を切り離してはなりません。これは、今日、文化と科学にたざさわる人々にとって重要な課題です。現代では知識が細分化され、現代思想にその兆候が表れていますが、物事や、さらには人間までもが単なる手段とみなされていきます。教師、研究者、学生の皆さん、勇気をもって、共通善と結びついた大学の本質と目的を問いかけてください。

新世代の若者たちには、自由な人間として育ち、真理を愛し、真理への忠実を保つための助けが必要で、真・善・美の探求は、実用的と言うよりむしろ、文化的・

倫理的な訓練であり、人類の進歩と福音化への過程に貢献するものです。

**5** 兄弟姉妹の皆さん、キリストに目を向けてください。キリストは人間に関する真理、自由の起源・源です。歴史の書の封印を破り、求める人の心に歴史の成就を啓示されるのです。  
 (一)文化の福音化。それは、皆さんに委ねられた使命です。大学教育や科学研究の分野に関わるのみならず、全教会共同体が、真の価値と福音の理想に注目している文化の発展に直接寄与することを求めています。

心からの激励を送ると共に、皆さん一人ひとりがこの仕事を助けてくださるよう望みます。

**6** (一)もうすぐクリスマスです。この機会にもう一度教会は、人類のために祈ります。ヨハネ福音書の冒頭にあるように、みことばが人となって私たちにうちに住まれ、そのみことばはイエズス・キリストを受け入れる人々に神の子となる力を与えてくださいますように。(ヨハネ1:12、14参照)

とは、御独り子と共に神の子とされることです。そして皆さんのためにも、ローマ司教はこれ以上すばらしいことを願うことができません。

神の霊がいつも皆さんを導き、神の子としてキリストを証し、キリストから来る自由を深く味わい、そこから力を汲み取ることができまうように。神の子の自由をもって地の面を、古きヨーロッパの国と世界のあらゆる民族を新たにすることができまうように。  
 クリスマスの喜び、深く完全な喜びが皆さんにありますよう。アーメン。(九一・十二・十七、ローマの学生たちとの集いで。)

## 福音宣教は………神を待ち構える………ところから………

「天の国は、十人の乙女にたとえてよい。」(マテオ25:1)

キリストはわかりやすいたとえ話で教えられました。内容は想像力を働かせれば容易に把握できるでしょう。同時に、たとえ話は聞き手の心をもう一つの实在、超自然的・神聖な实在、つまり天の国に向けさせます。人間はこの現実へと召されています。この地上で始まり、天における神の都で完成する神の国へと私たちは呼ばれています。

神の国は人間の終末的未来でもあります。キリストはその証人として、御父と同等の永遠の御子として、御父の玉座に座っておられます。

十人の乙女のたとえ話では、天の宴席に招かれた人、つまり神の国に入るように招かれた人々に注意が向けられています。

十人の乙女のたとえ話はいづの時代でも通用します。確かに今日、婚姻の祝いの伝統形式は変化しましたが、まだこのたとえ話は時宜に適っています。

(一)では、どの婚姻について語っているのでしょうか？ 私たちが出迎える花婿とは誰でしょうか？ このたとえ話を通して、婚姻のイメージで示された神の秘義に近づくことができます。ここでは、キリストの結婚式について語っています。キリストが花婿です。神の御子は聖霊の御力を通して処女マリアの胎内で人となられ、人性、私たち人間の本性と、婚姻を結ばれました。

この最初の婚姻によって、神であり人間であるキリストは全ての人と結ばれました。全ての人を贖い、救うために人となられたキリストは、この世の罪を取り去り給う神の小羊です。キリストの花嫁は、キリストが築かれた教会であ

# 不変の教え

り、教会は救いのみわざにおいてキリストとともに働きます。そして教会において、永遠の御独り子にならって神の生命にあずかるよう招かれて神の養子の息子や娘が生れ育ちます。



あらゆる路地で叫びが上ります。「さあ、花婿だ。出迎えよ。」(マテオ25・6参照)

西暦二千年を間近にして、今日再びこの叫びが上ります。「さあ、花婿だ。出迎えよ。」(マテオ25・6参照)神の言葉は時宜にかなっています。「警戒して、用意をしないで下さい。」(マテオ25・5参照)に似てはいないでしょうか。この乙女たちは眠り続けていたために、花婿の到着に気がつきませんでした。花婿の死と復活という大きな出来事が起つても目を覚まらなかったのです。人間の知恵の働きはすばらしい。しかし神の知恵のみわざを認めることができるよう、目を開けていられるよう、耳を傾けていられますように。



皆さん。この世の生活は花婿と出会うために不寝番で用意をしないで下さい。」

では一人一人がどのようにすればよいのでしょうか。救い主がその方法を示しておられます。福音は何を「警戒」せよと言っているのでしょうか。たとえ話の中の賢い乙女はどのような準備をしていたのでしょうか。詩篇は語っています。「神よ、あなたは私の神、私の魂は切にあなたを求め、あな

たに渴く。枯れた、渴いた、水気のない地で、私の全てはあなたを恋う。」(詩篇62(63)・2) 神に心を向けていると、神がこの世、この町、私たち一人一人の中に現存しておられることに気づきます。「私たちは神の中に生き、動き、存在するものです。」(使徒行録17・28) 神のもとから生れた私たちに、神に向かつて進む以外に道はありません。この道が唯一の道であることを知っていますか。岩だらけの断崖で道に迷ってはいませんか。主の道からそれ始めてはいないでしょうか。



たとえ話の中の居眠りをしていてやがて眠り込んでしまった乙女(マテオ25・5参照)に似てはいないでしょうか。この乙女たちは眠り続けていたために、花婿の到着に気がつきませんでした。花婿の死と復活という大きな出来事が起つても目を覚まらなかったのです。人間の知恵の働きはすばらしい。しかし神の知恵のみわざを認めることができるよう、目を開けていられるよう、耳を傾けていられますように。

ともしびの灯を消さないように。役に立たない情報の山に翻弄されないようにしましょう。それは私たちが神から遠ざけ、花婿の声、「出迎えよ」と叫ぶ教会の声を聞こえなくしてしまいます。闇に留まることはできません。眠りについた人々につ

いて無関心であってはなりません。(イテサロニケ4・13参照) 家族についても、教会の人々についても、同じ町に住んでいてすでに亡くなった人々についても。十一月は亡くなった人々を追悼する月。無知であってはなりません。希望のない悲しみにおぼれてはなりません。(同4・13参照) 現代、人間は死の意味をよく理解していないようです。死の意味を理解せず、受胎の瞬間に生れた生

Tota pulchra es Maria! 全くもって麗しいマリヤ。今日十二月八日は、深い喜びをもってマリヤのもとへおもむき、無原罪の御宿りというすばらしい特権について、考えましょう。

私たちは、マリヤが原罪の影響なく母の胎に宿られたと信じています。原罪こそは「始めから」人類を神から遠ざけてきたものです。神の母となるべき祝福された処女は、その存在の初めから成聖の恩寵に満たされて、神の生命の最高の高みにあずかっていました。

## 無原罪の御宿り

無原罪の御宿りの崇高な美しさは、「救いの歴史」の中でも特別な部分をなしています。それは神秘的ながらも本物の歴史

命の意味さえ軽視して、危険な眠りに落ちています。受けた使命の重大さ、神によって与えられた尊厳にともなう責任から顔を背けようとして、居眠りを装っています。花婿の声を聞こうとしません。十一月は神のみもとに憩う死者を思い起す月。「イエズスが死んで復活されたことを信じているなら、神はイエズスにおいて休んだ者を、イエズスとともに連れてこられるのである

で、宇宙と人祖が造られた時から始まり、人祖の罪による神への反抗と、その結果として全人類が巻き込まれた混乱を経て、贖いのわざで頂点に達します。贖いの実りは、栄光のうち

にキリストが戻られるまで、全ての信じる者の上に聖霊によって注がれます。ですから無原罪の御宿りは、マリヤ一人の問

題と違うにとどまらず、教会全体にわたって、私たちが神の創造と贖いの御旨について深く黙想するよう招かれています。人類の歴史完成への確かな見通しは、贖いの光に照らされな

う。(イテサロニケ4・14) 警戒していなさい。諸聖人の通功のもとで生きていくことを思い起しましょう。神の国の宴席にキリストと共に与れるように、たとえ話の賢い乙女にならって、いつも用意していきましょう。教会は繰り返します。「さあ、花婿だ。出迎えよ。」警戒して、用意をしないで下さい。アーメン。(九〇・十一・十二)

今日、私たちは心からの信頼を込めて、イエズスの無原罪の御母、また私たちの母である方に熱い祈りを捧げます。「私たちの代願者、聖性の模範。」(序唱より) 善と悪、光と闇、真と偽の絶え間ない対立、人間の歴史と人間一人ひとりの特徴づけているこの対立のさなかで、マリヤの助けを呼び求めます。まことに、聖母は私たちの弱さと希望をご存じます。

無原罪のマリヤ、子としての愛をもって、御身に向かいます。御身の御子、私たちの兄弟キリストによって贖われた人類を照らし、導き、救ってください。迷う者を呼び戻し、罪人を改心させ、苦しむ人を支え、すでに御身を知り愛する者たちを助け、慰めたまえ。「偉大な方、聖マリヤ。御身から正義の太陽、我らの主キリストがお生まれになった。」

(九一・十一・八)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説  
なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部八十円  
送料実費 一年予約九百円 送料六百円 二十部以上の一括購入  
から送料不要

郵便振替 神戸 3-72393